

第1 はじめに

調査の概要

目的

ヤングケアラー個人を適切に把握し、支援が必要な場合には早期に支援につなぐこと、並びにこどもたちがSOSを発信する機会を確保することを目的とする。

期間

- ◆ 小・中学校 令和7年9月1日（月）～9月19日（金）
- ◆ 高等学校 令和7年8月22日（金）～9月19日（金）

基準日

令和7年4月1日（火）

対象

市内の学校に在学している小学4～高校3年生及びその学校

種類

- ◆ 個別調査
児童・生徒個人に対して、普段の学校生活や行っているお世話の内容等を調査する。
- ◆ 学校調査
市内の各学校に対して、ヤングケアラーに対する支援の実情、今後必要と思われる支援等を調査する。

回答

個別調査及び学校調査において、次のいずれかの方法により回答する。
(1) オンライン回答 (2) 紙の調査票による回答

集計

設問ごとの集計は、個人・学校を特定しない形式で統計的に処理する。

調査の回答状況

◆ 個別調査

R7	区分	対象数 (人) 【A】	回答数 (人) 【B】	回答同意者数 (人) 【C】	回答率 (%) 【D=C/A】
	小学生	1,518	1,382	1,365	89.9
	中学生	1,550	1,147	1,122	72.4
	高校生	1,594	1,119	971	60.9
	計	4,662	3,648	3,458	74.2

(参考) R4	区分	対象数 (人) 【A'】	回答数 (人) 【B'】	回答同意者数 (人) 【C'】	回答率 (%) 【D' =C' /A'】
	小学生	1,585	1,000	998	63.0
	中学生	1,730	1,335	1,331	76.9
	高校生	1,638	714	665	40.6
	計	4,953	3,049	2,994	60.4

◆ 学校調査

区分	対象数 (校) 【E】	回答数 (校) 【F】	回答率 (%) 【G=F/E】	R4 回答率 (%)
小学校	20	20	100.0	100.0
中学校	10	10	100.0	100.0
高等学校	6	6	100.0	100.0
計	36	36	100.0	100.0

第2 個別調査

お世話について

お世話をしている家族の有無

お世話をしている家族が「いる」こどもの人数は、前回（令和4年度）調査では合計60人であったのに対して、今回（令和7年度）調査では、当該設問については無回答であるが、他の回答からお世話をしている家族が「いる」と推定できる者を含めて211人※となった。

<令和4年度調査>

上段：人 下段：%	お世話をしている家族が「いる」		いない	無回答	調査数（n）
	同じ家に住んでいる家族の中にいる	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる			
小学生	23 2.3	6 0.6	946 94.8	23 2.3	998 100.0
中学生	19 1.4	3 0.2	1,289 96.8	20 1.5	1,331 100.0
高校生	8 1.2	1 0.2	651 97.9	5 0.8	665 100.0
合計	50 1.7	10 0.3	2,886 96.4	48 1.6	2,994 100.0

<令和7年度調査>

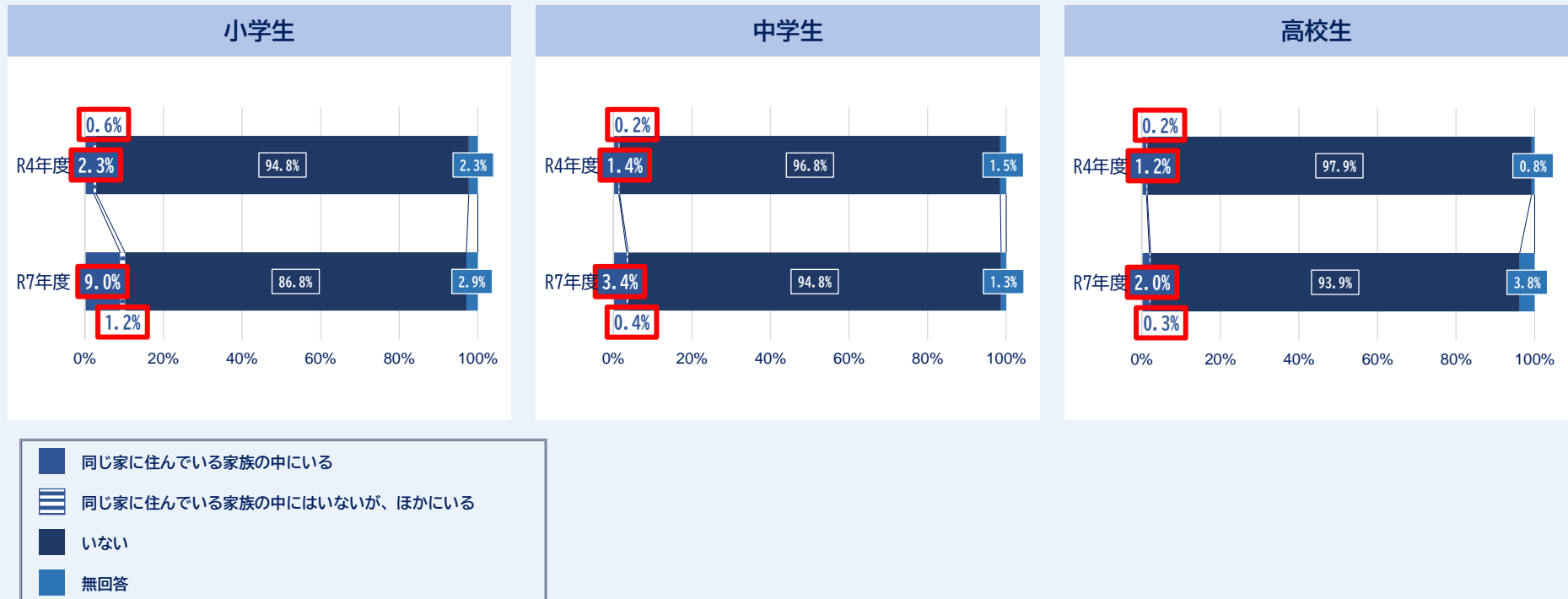
上段：人 下段：%	お世話をしている家族が「いる」		いない	無回答※	調査数（n）
	同じ家に住んでいる家族の中にいる	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる			
小学生	123 9.0	17 1.2	1,185 86.8	40 2.9	1,365 100.0
中学生	38 3.4	5 0.4	1,064 94.8	15 1.3	1,122 100.0
高校生	19 2.0	3 0.3	912 93.9	37 3.8	971 100.0
合計	180 5.2	25 0.7	3,161 91.4	92 2.7	3,458 100.0

※ 本問で「無回答」であるが、以降の回答内容からお世話をしている家族が「いる」と推定できる6人を含む。

お世話をしている家族の有無

今回調査では、「同じ家に住んでいる家族の中にいる」の割合が、小学生で9.0%、中学生で3.4%、高校生で2.0%となり、いずれも前回調査より割合が増加した。

「同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる」の割合も同様に増加した。



お世話をしていることで、やりたいけどできていないこと

高校生では、回答者の中にやりたいけどできていないことが「ある」者はいなかった。

一方で、小学生では「宿題や勉強をする時間がない」、中学生では「友人と遊ぶことができない」の割合が高くなっている。

<令和4年度調査>

	やりたいけどできていないことが「ある」								特になし	無回答	調査数 (n)	
	学校に行きたくても行けない	学校を遅刻や早退してしまう	宿題や勉強をする時間がない	睡眠時間が取れない	友人と遊ぶことができない	スポーツ・部活や習い事ができない、もしくはやめなければならなかった	進学などの進路を変更しなければならぬ、もしくは変更した	自分の時間が取れない				その他
上段：人 下段：%												
小学生	0 0.0	1 3.4	5 17.2	6 20.7	0 0.0	0 0.0	/	6 20.7	0 0.0	17 58.6	0 0.0	29 -
中学生	1 4.5	2 9.1	5 22.7	1 4.5	1 4.5	1 4.5	1 4.5	4 18.2	0 0.0	11 50.0	1 4.5	22 -
高校生	0 0.0	0 0.0	2 22.2	0 0.0	4 44.4	0 0.0	0 0.0	2 22.2	2 22.2	4 44.4	0 0.0	9 -
合計	1 1.7	3 5.0	12 20.0	7 11.7	5 8.3	1 1.7	1 1.7	12 20.0	2 3.3	32 53.3	1 1.7	60 -

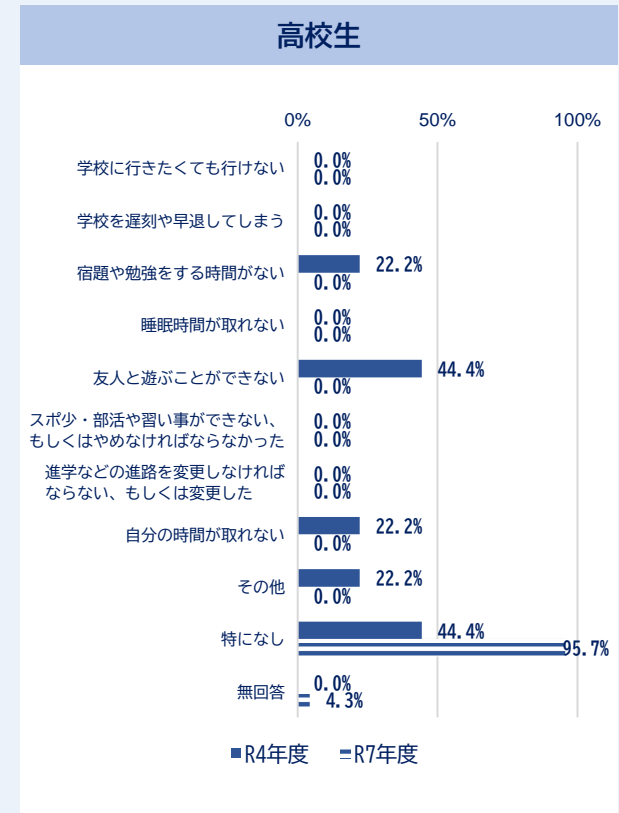
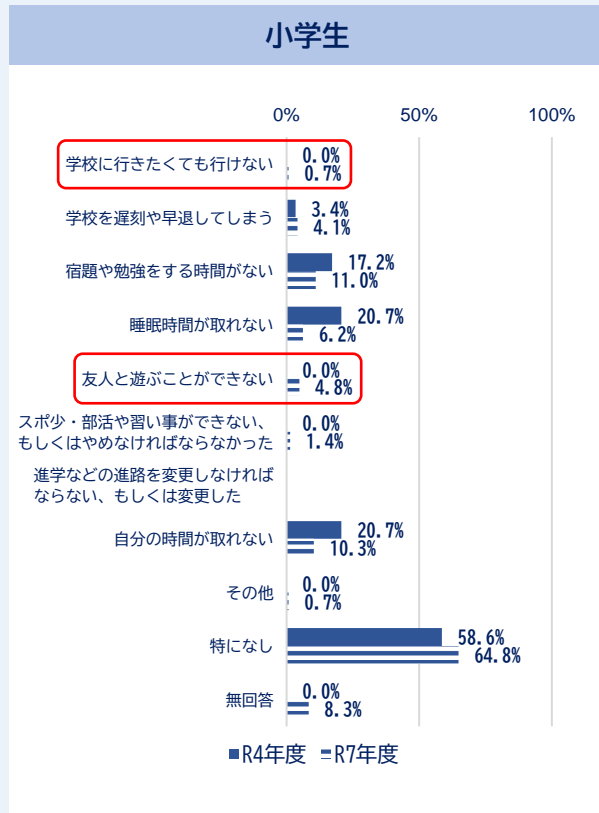
<令和7年度調査>

	やりたいけどできていないことが「ある」								特になし	無回答	調査数 (n)	
	学校に行きたくても行けない	学校を遅刻や早退してしまう	宿題や勉強をする時間がない	睡眠時間が取れない	友人と遊ぶことができない	スポーツ・部活や習い事ができない、もしくはやめなければならなかった	進学などの進路を変更しなければならぬ、もしくは変更した	自分の時間が取れない				その他
上段：人 下段：%												
小学生	1 0.7	6 4.1	16 11.0	9 6.2	7 4.8	2 1.4	/	15 10.3	1 0.7	94 64.8	12 8.3	145 -
中学生	0 0.0	2 4.7	2 4.7	4 9.3	5 11.6	0 0.0	0 0.0	4 9.3	0 0.0	32 74.4	2 4.7	43 -
高校生	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	22 95.7	1 4.3	23 -
合計	1 0.5	8 3.8	18 8.5	13 6.2	12 5.7	2 0.9	0 0.0	19 9.0	1 0.5	148 70.1	15 7.1	211 -

お世話をしていることで、やりたいけどできていないこと

全ての学校区分において前回調査より「特になし」の割合が増加した。

一方で、「友人と遊ぶことができない」の割合は、小学生と中学生双方で増加し、小学生では「学校に行きたくても行けない」、中学生では「睡眠時間が取れない」の割合が増加した。



お世話をすることによる負担感

前回調査と比較して、全体的にきつさを「感じている」こどもの割合は減少しているものの、小学生では「身体的にきつい」、中学生では「精神的にきつい」、高校生では「時間的余裕がない」の割合が高くなっている。

<令和4年度調査>

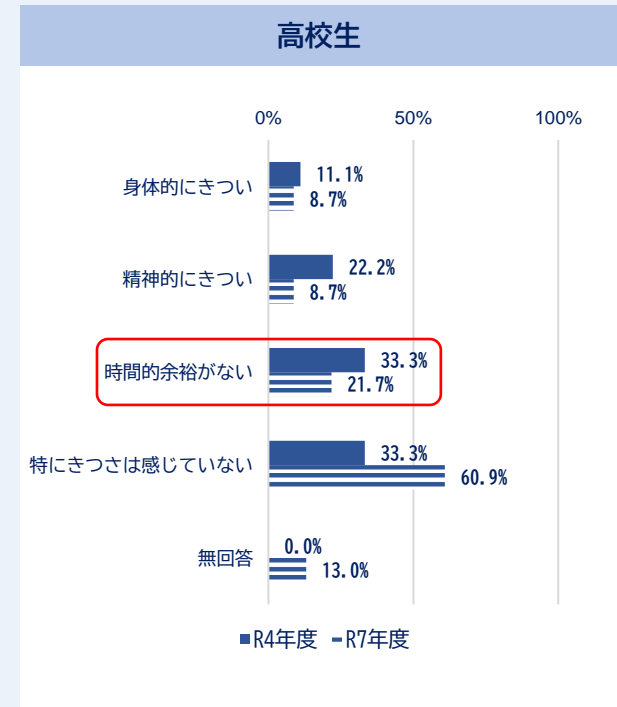
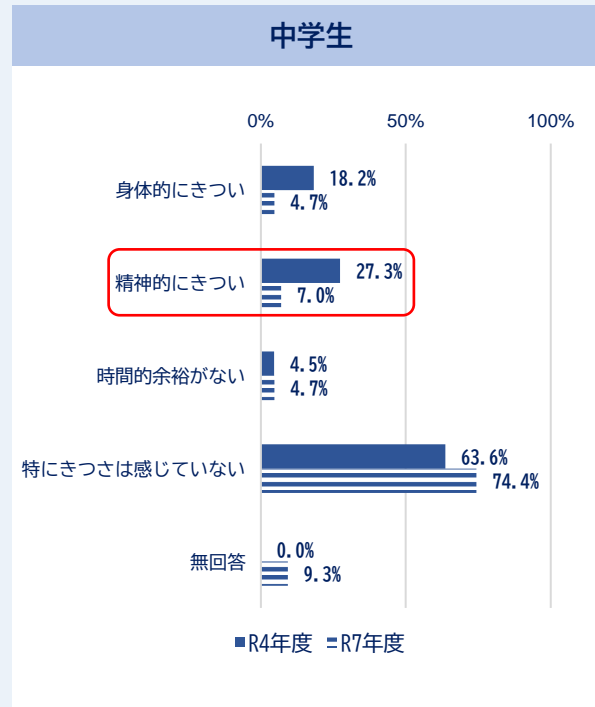
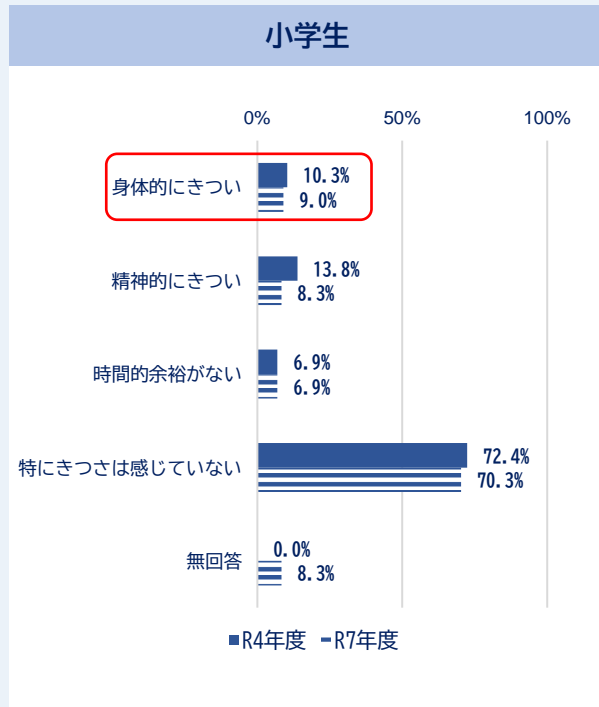
上段：人 下段：%	きつさを「感じている」			特にきつさは感じて いない	無回答	調査数 (n)
	身体的にきつい	精神的にきつい	時間的余裕がない			
小学生	3 10.3	4 13.8	2 6.9	21 72.4	0 0.0	29 -
中学生	4 18.2	6 27.3	1 4.5	14 63.6	0 0.0	22 -
高校生	1 11.1	2 22.2	3 33.3	3 33.3	0 0.0	9 -
合計	8 13.3	12 20.0	6 10.0	38 63.3	0 0.0	60 -

<令和7年度調査>

上段：人 下段：%	きつさを「感じている」			特にきつさは感じて いない	無回答	調査数 (n)
	身体的にきつい	精神的にきつい	時間的余裕がない			
小学生	13 9.0	12 8.3	10 6.9	102 70.3	12 8.3	145 -
中学生	2 4.7	3 7.0	2 4.7	32 74.4	4 9.3	43 -
高校生	2 8.7	2 8.7	5 21.7	14 60.9	3 13.0	23 -
合計	17 8.1	17 8.1	17 8.1	148 70.1	19 9.0	211 -

お世話をすることによる負担感

全ての学校区分で「特にきつさは感じていない」の割合が半数を超え、最も高くなっているものの、身体的、精神的及び時間的それぞれの負担を感じているこどもは依然として存在している。



お世話に関する相談経験の有無

前回調査と比較して、お世話に関する相談経験が「ない」こどもの割合は減少したものの、依然として「ある」よりも高い状況が続いている。

<令和4年度調査>

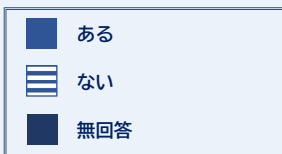
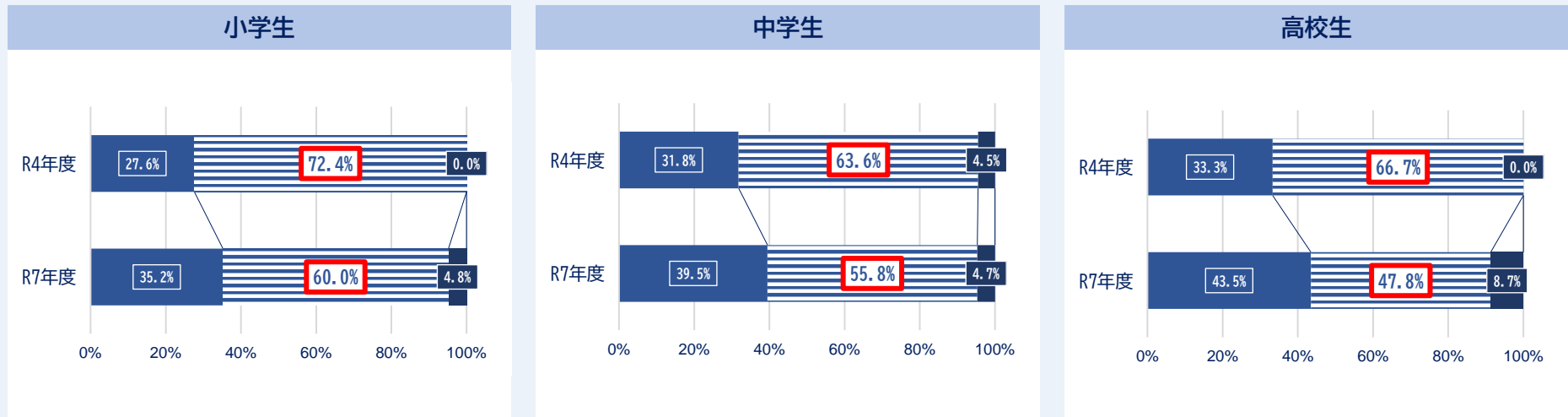
	ある	ない	無回答	調査数 (n)
上段：人 下段：%				
小学生	8 27.6	21 72.4	0 0.0	29 100.0
中学生	7 31.8	14 63.6	1 4.5	22 100.0
高校生	3 33.3	6 66.7	0 0.0	9 100.0
合計	18 30.0	41 68.3	1 1.7	60 100.0

<令和7年度調査>

	ある	ない	無回答	調査数 (n)
上段：人 下段：%				
小学生	51 35.2	87 60.0	7 4.8	145 100.0
中学生	17 39.5	24 55.8	2 4.7	43 100.0
高校生	10 43.5	11 47.8	2 8.7	23 100.0
合計	78 37.0	122 57.8	11 5.2	211 100.0

お世話に関する相談経験の有無

相談したことが「ある」と回答した割合が、全ての学校区分で前回調査より増加した一方で、未だ半数程度の子どもたちは、相談した経験が「ない」と回答している。



お世話に関する相談をしない理由

お世話に関する相談経験が「ない」子どもたちが相談をしない理由として、前回調査と比較しても、依然として「だれかに相談するほどの悩みではないと感じているから」の割合が最も高くなり、半数以上を占めた。

<令和4年度調査>

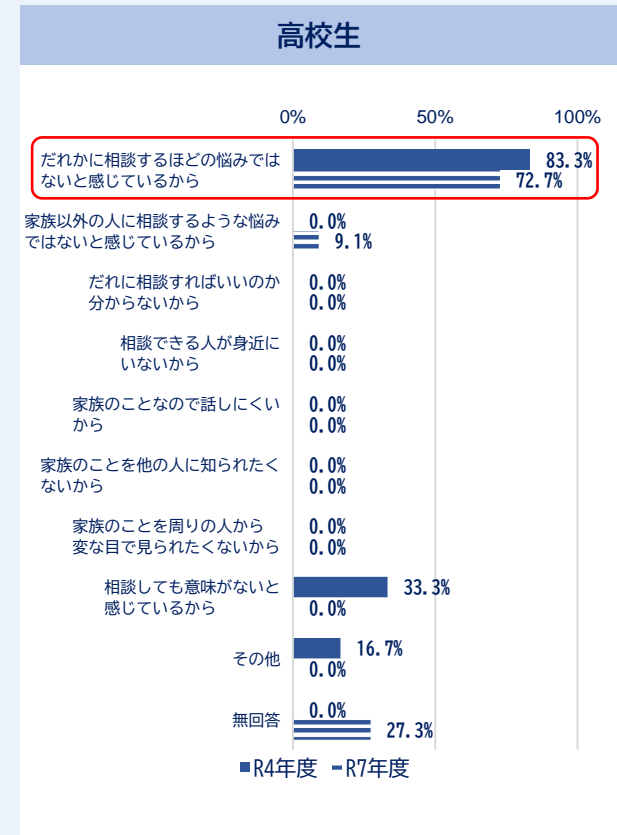
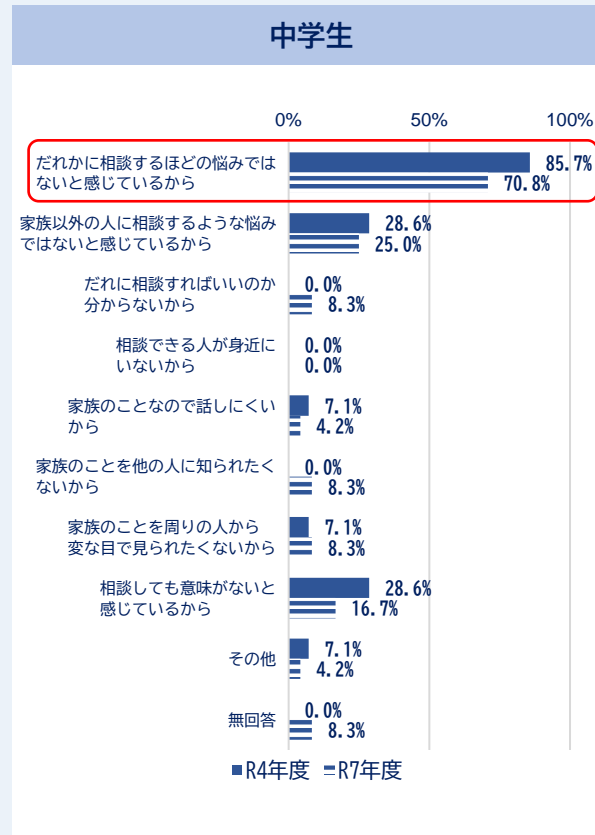
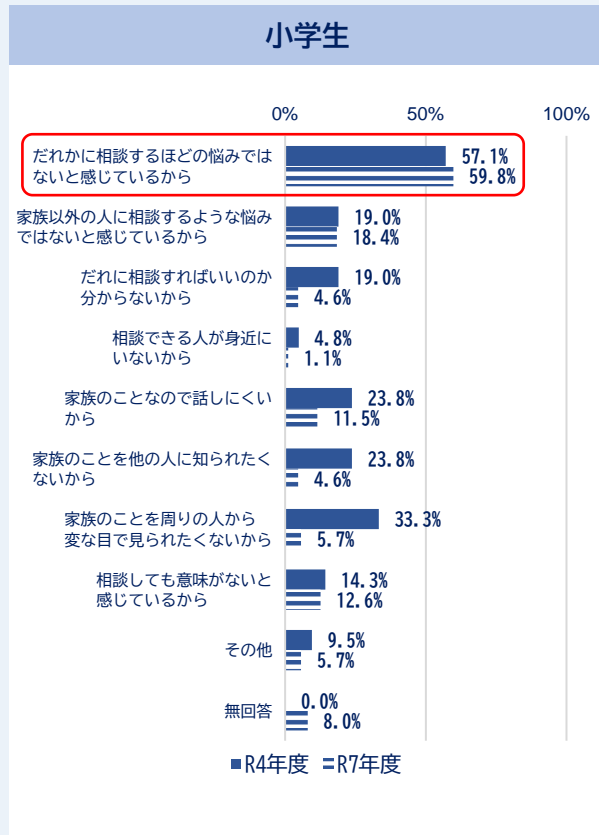
	だれかに相談するほどの悩みではないと感じているから	家族以外の人に相談するような悩みではないと感じているから	だれに相談すればいいのかわからないから	相談できる人が身近にいないから	家族のことなどで話しにくいから	家族のことを他の人に知られたくないから	家族のことを周りの人から変な目で見られたくないから	相談しても意味がないと感じているから	その他	無回答	調査数（n）
小学生	12 57.1	4 19.0	4 19.0	1 4.8	5 23.8	5 23.8	7 33.3	3 14.3	2 9.5	0 0.0	21 -
中学生	12 85.7	4 28.6	0 0.0	0 0.0	1 7.1	0 0.0	1 7.1	4 28.6	1 7.1	0 0.0	14 -
高校生	5 83.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 33.3	1 16.7	0 0.0	6 -
合計	29 70.7	8 19.5	4 9.8	1 2.4	6 14.6	5 12.2	8 19.5	9 22.0	4 9.8	0 0.0	41 -

<令和7年度調査>

	だれかに相談するほどの悩みではないと感じているから	家族以外の人に相談するような悩みではないと感じているから	だれに相談すればいいのかわからないから	相談できる人が身近にいないから	家族のことなどで話しにくいから	家族のことを他の人に知られたくないから	家族のことを周りの人から変な目で見られたくないから	相談しても意味がないと感じているから	その他	無回答	調査数（n）
小学生	52 59.8	16 18.4	4 4.6	1 1.1	10 11.5	4 4.6	5 5.7	11 12.6	5 5.7	7 8.0	87 -
中学生	17 70.8	6 25.0	2 8.3	0 0.0	1 4.2	2 8.3	2 8.3	4 16.7	1 4.2	2 8.3	24 -
高校生	8 72.7	1 9.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 27.3	11 -
合計	77 63.1	23 18.9	6 4.9	1 0.8	11 9.0	6 4.9	7 5.7	15 12.3	6 4.9	12 9.8	122 -

お世話に関する相談をしない理由

前回調査と同様に、今回調査でも「だれかに相談するほどの悩みではないと感じているから」の割合が最も高くなっており、他の項目と比較しても突出している。



お世話をしている家族の有無 × ヤングケアラーへの該当性

お世話をしている家族が「いる」かつ自分自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答したこどもの人数は、前回調査で合計9人であったのに対し、今回調査では合計23人（小学生15人、中学生5人、高校生3人）となった。

<令和4年度調査>

		あてはまる	あてはまらない	わからない	無回答	調査数 (n)
上段：人 下段：%						
小学生	同じ家に住んでいる家族の中にいる	5 21.7	7 30.4	11 47.8	0 0.0	23 100.0
	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	0 0.0	1 16.7	5 83.3	0 0.0	6 100.0
	無回答					
中学生	同じ家に住んでいる家族の中にいる	3 15.8	3 15.8	13 68.4	0 0.0	19 100.0
	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	0 0.0	0 0.0	3 100.0	0 0.0	3 100.0
	無回答					
高校生	同じ家に住んでいる家族の中にいる	1 12.5	2 25.0	5 62.5	0 0.0	8 100.0
	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0
	無回答					
合計		9 15.0	14 23.3	37 61.7	0 0.0	60 100.0

<令和7年度調査>

		あてはまる	あてはまらない	わからない	無回答	調査数 (n)
上段：人 下段：%						
小学生	同じ家に住んでいる家族の中にいる	15 12.2	41 33.3	61 49.6	6 4.9	123 100.0
	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	0 0.0	7 41.2	9 52.9	1 5.9	17 100.0
	無回答 ※	0 0.0	1 20.0	4 80.0	0 0.0	5 100.0
中学生	同じ家に住んでいる家族の中にいる	5 13.2	18 47.4	15 39.5	0 0.0	38 100.0
	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	0 0.0	2 40.0	3 60.0	0 0.0	5 100.0
	無回答	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
高校生	同じ家に住んでいる家族の中にいる	3 15.8	10 52.6	5 26.3	1 5.3	19 100.0
	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	0 0.0	1 33.3	2 66.7	0 0.0	3 100.0
	無回答 ※	0 0.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	1 100.0
合計		23 10.9	80 37.9	100 47.4	8 3.8	211 100.0

※ 令和7年度調査では、お世話をしている家族の有無について無回答であるが、それ以降の回答内容からそういった家族がいることが推定できる6人（小学生5人、高校生1人）を含んでいる。

お世話をしている家族の有無 × ヤングケアラーへの該当性

お世話をしている家族が「いる」、かつ自分自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答したこどもの割合は、小学生と中学生において、前回調査より減少したものの、高校生においては増加した。

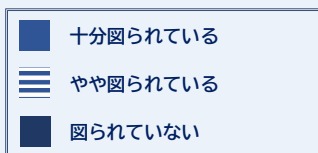
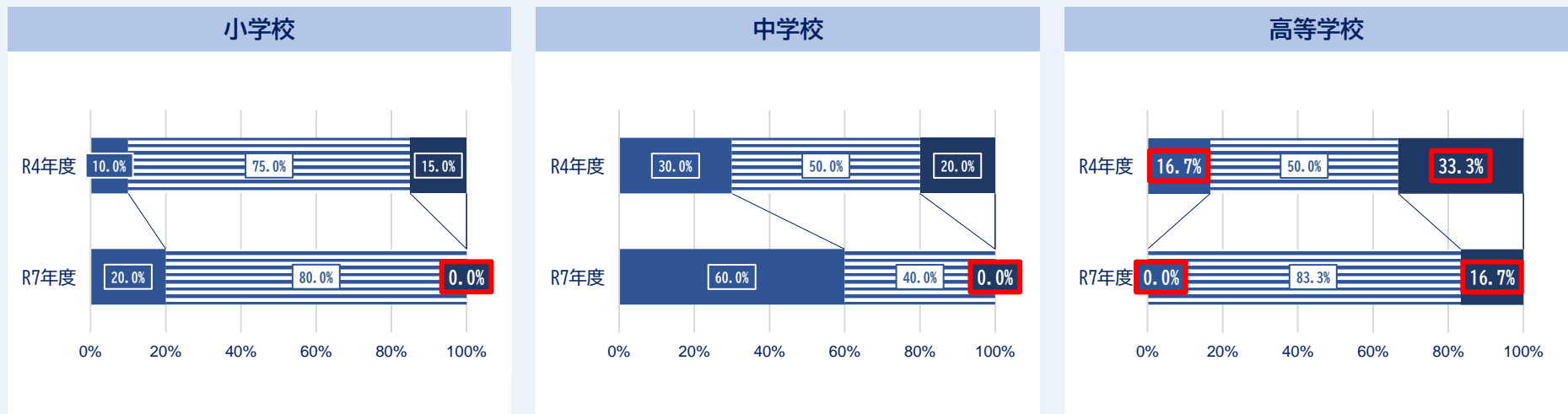


第3 学校調査

ヤングケアラーについて

教職員間でのヤングケアラーに関する共通認識

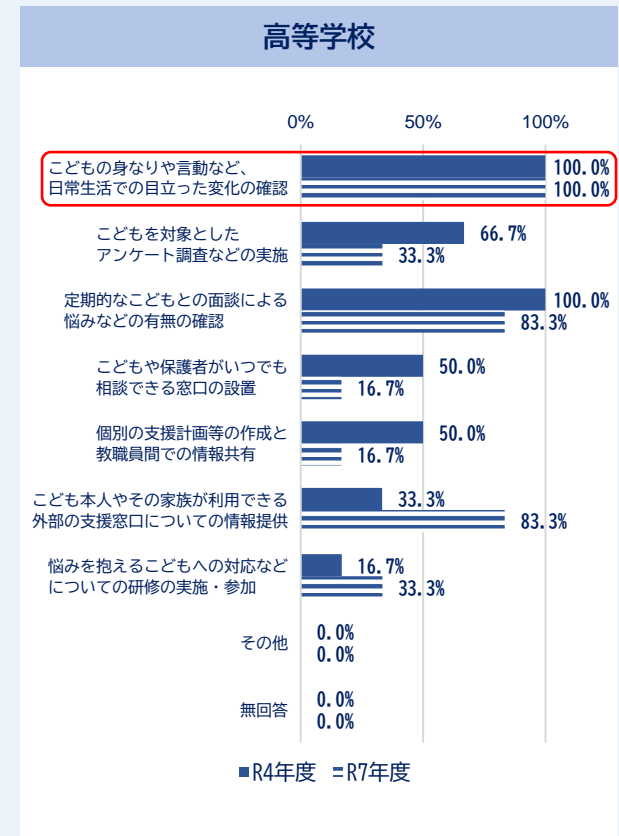
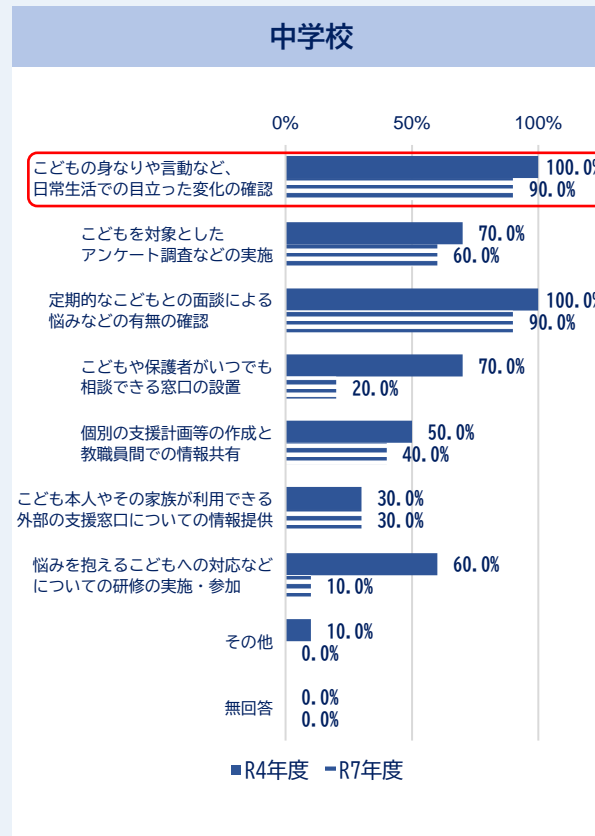
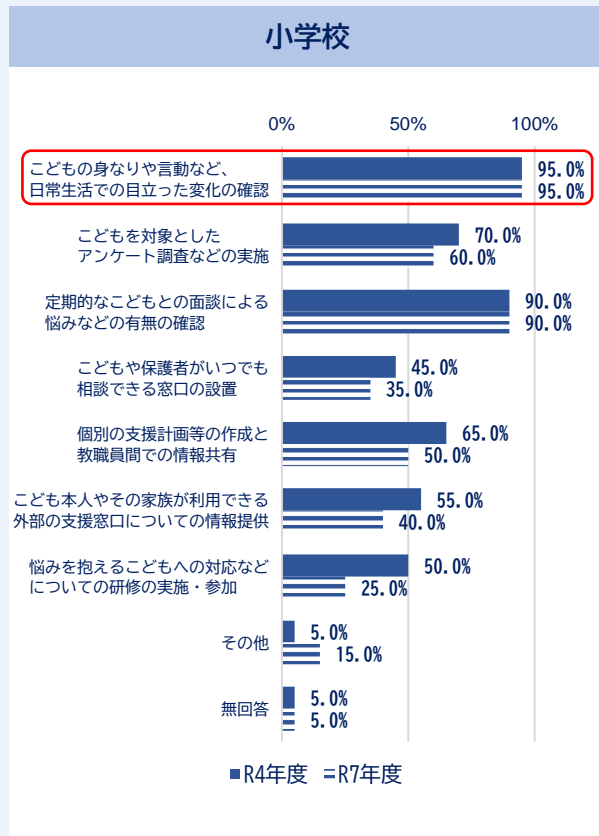
小学校と中学校では、全ての学校が「十分図られている」または「やや図られている」と回答した一方で、高等学校では、「十分図られている」と回答した学校は無く、「図られていない」と回答した学校もあった。



ヤングケアラーなど悩みを抱える子どもの把握や支援にあたって工夫していること

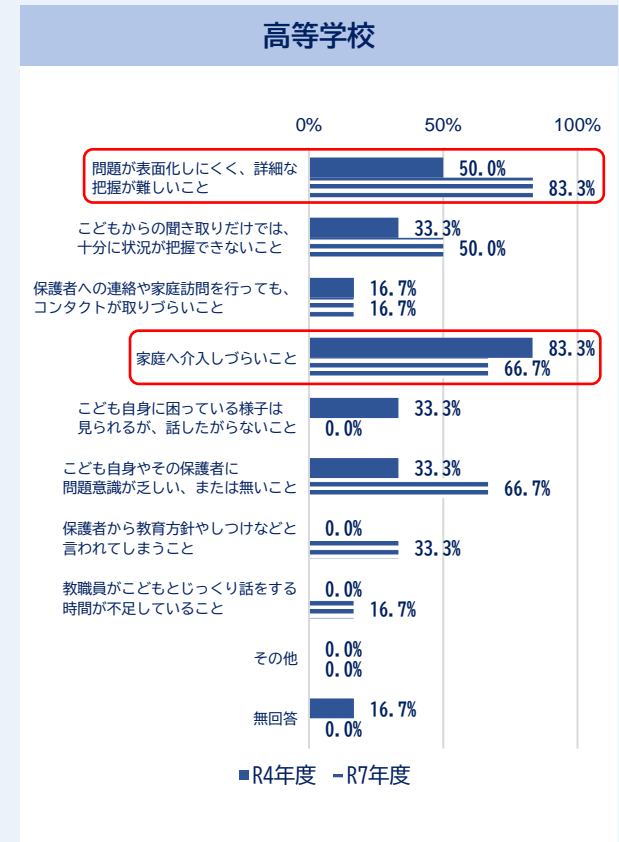
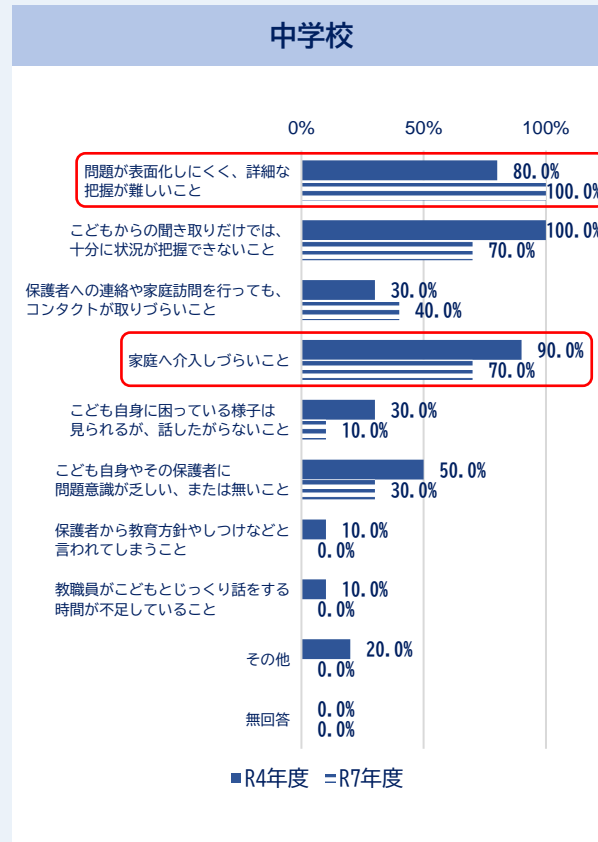
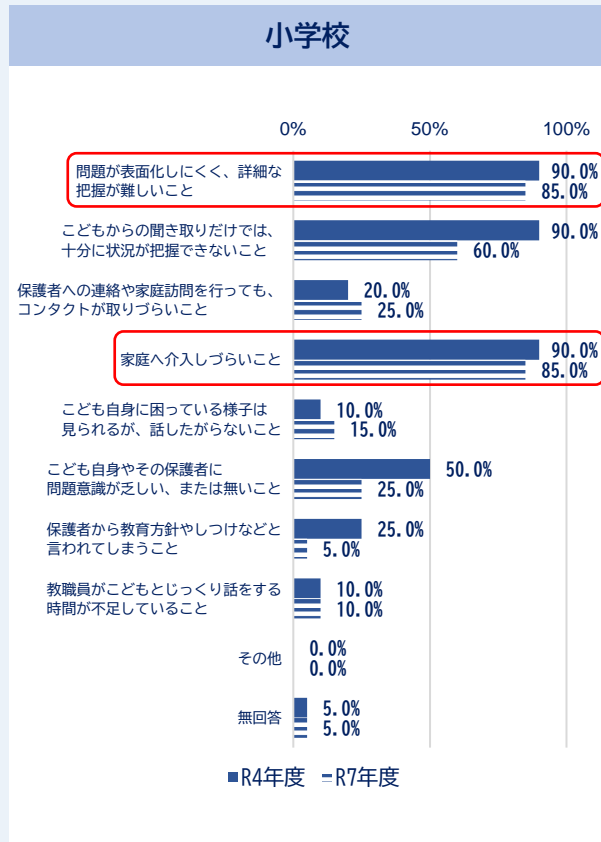
前回調査と同様に、今回調査においても、全ての学校区分で「子どもの身なりや言動など、日常生活での目立った変化の確認」の割合が最も高くなった。

なお、学校区分に関わらず、全体として、各項目の回答割合が減少傾向にある。



ヤングケアラーなど悩みを抱えるこどもの把握や支援にあたって難しいと感じること

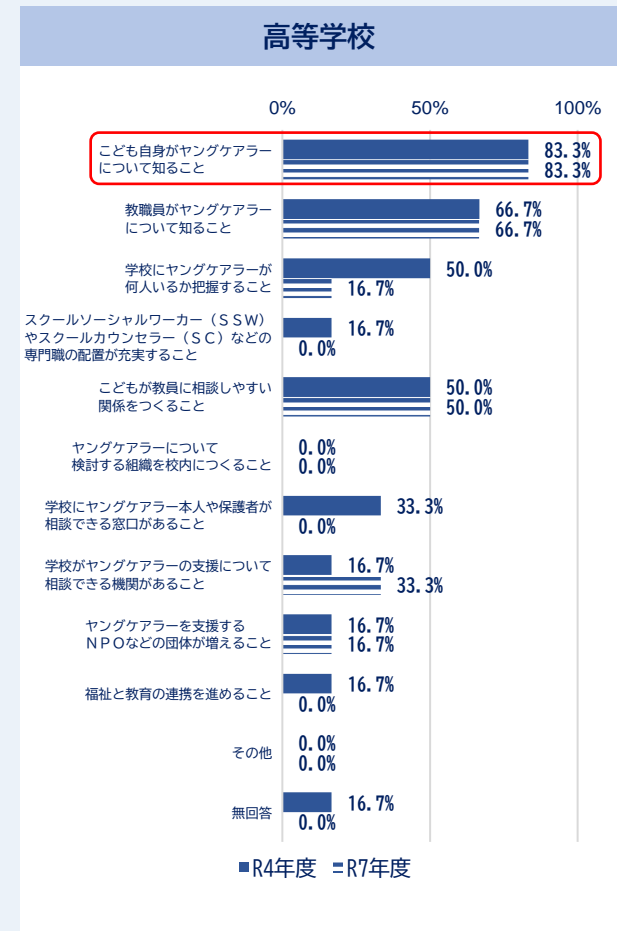
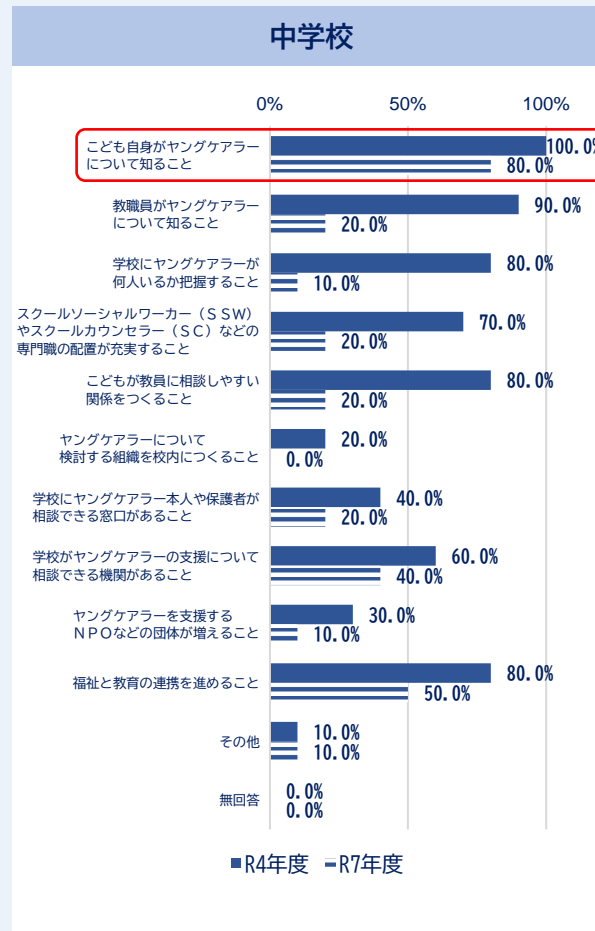
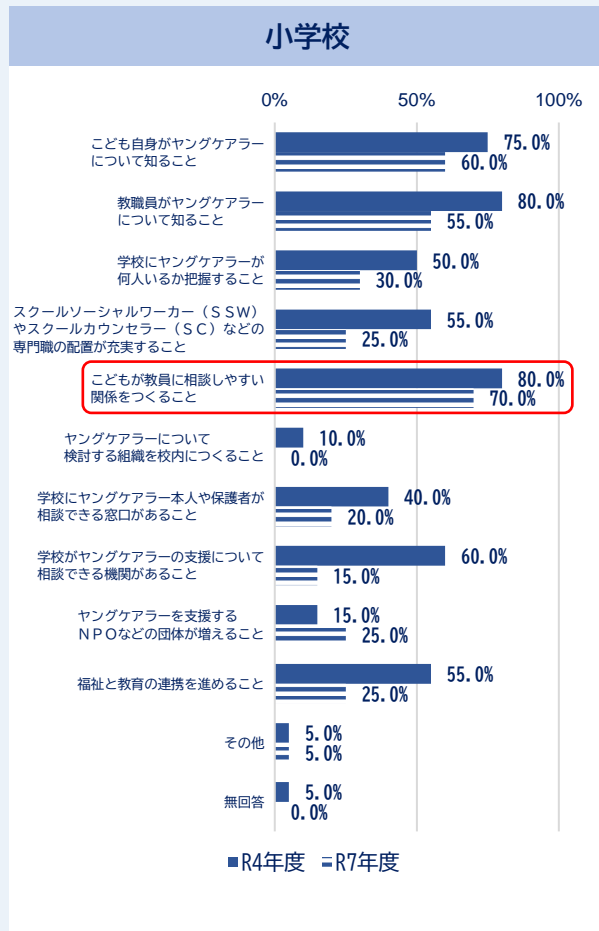
前回調査と同様に、今回調査においても、全ての学校区分で「問題が表面化しにくく、詳細な把握が難しいこと」の割合が最も高くなった。また、次いで「家庭へ介入しづらいこと」の割合も高い傾向にあり、学校では家庭状況の把握に苦慮していることが分かる。



ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと

小学校では、「子どもが教員に相談しやすい関係をつくること」の割合が最も高く、中学校と高等学校では、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」の割合が最も高くなっている。

なお、学校区分に関わらず、全体として、各項目の回答割合が減少傾向にある。



第4 調査結果のまとめと考察

個別調査

お世話をしている家族の人数

一人のこどもが複数人の家族のお世話をを行うということは、感じ方に個人差はあるものの、通常大きな負担が伴い、こどもとしての時間の制約を受けることになる。また、お世話を行っているこどもは学年が上がるにつれ、家族内で「介護力」として見られていく一方で、自身の将来を考えながら、必要な選択を迫られることになる。

自身の将来を考えるにあたり、家族のお世話によって自身の選択肢の幅を狭められることのないよう、必要な支援を行わなければならない。

こうした状況から、お世話をするこどもたちの環境や背景を適切に把握し、アセスメントを行った上で、必要に応じた事業やサービスへ誘導し、こどもたちの負担軽減を図りながら、こどもらしい生活が送れるようサポートする必要がある。

お世話に関する悩みなどを相談すること

お世話に関する悩みなどを誰にも話していない理由について、「誰かに相談するほどの悩みではないと感じているから」が全ての学校区分において半数以上を占めている。前回調査と比較すると、小学生ではその割合が増加し、中学生及び高校生においては、8割を超えていた割合が7割程度へ減少したものの、依然として高い割合を占めている状況である。

この結果から、家族のお世話をしているこどもたちの中に、お世話に関する悩みなどは「相談しても良い」「相談することで生活が改善する可能性がある」という認識が未だに乏しいということが考えられる。

また、こどもたちにとって、「相談を行った後の支援のイメージが見えない」ということも相談を控える、躊躇させる要因となっている可能性もあるため、ヤングケアラーを支援する立場として、保護者だけではなく、こどもたちにも相談したらどういった機関が支援に関わるのか、どういった支援を受けられるのかを十分に理解してもらうことも重要だと考えられる。

ヤングケアラーへの該当性

項目全体で見ると、前回調査より割合が減少したものがほとんどで支援ニーズ全体の低下が伺える。

この結果から、家族のお世話をすることもたちにとって、「お世話を
する」という行動自体が日常の「当たり前」になり、「支援を求める
ことができる」という認識自体がない場合や、学校や周りの大人へ相談
し、支援を受けた経験はあるものの、それがその子どもにとって解決に
至るものではなく、ましてや良い相談経験とはならなかった場合など
があると、支援ニーズが低下する要因となり得ると考えられる。

学校や周りの大人に対して求める支援

家族のお世話をしている子どもたちが、自身がヤングケアラーに該
当するかどうかについて、「あてはまる」と回答した割合は、前回調査
と比較して、高校生では増加したものの、小学生及び中学生では減少
し、「あてはまらない」と回答したこどもの割合は、全体として増加
している。

また、前回調査において、家族のお世話をすることもたちの半数以上
は、自身がヤングケアラーに該当するか「わからない」と回答したが、
今回調査では、その割合が高校生を除いて、全体として減少傾向にある
ことが伺える。

この結果から、ヤングケアラーの認知度が向上しつつあり、こども
自身が置かれている環境から、ヤングケアラーに該当するかどうかを
主観的に判断することができるようになりつつあると考えられる。

市としては、こども自身の主観的判断を十分に尊重しながら、客観的
視点からのアセスメントなども行い、こどもたちの気持ちに寄り添っ
た丁寧な支援を行っていく必要がある。

学校調査

ヤングケアラーについての共通認識

小学校と中学校では、全ての学校が「十分図られている」または「やや図られている」のいずれかを選択したのに対し、高等学校では、「十分図られている」を選択した学校は無く、「図られていない」を選択した学校は前回調査より減少したものの、未だにある。

小学校と中学校においては、教職員間での共通認識が十分とまではいかないものの、図られつつある状況だが、高等学校では、まだ図られていると認識できるまでの状況には至っていないことが分かる。

ヤングケアラーなど悩みを抱えるこどもの把握や支援にあたって工夫していること

学校として悩みを抱えるこどもの把握や支援にあたって行っていることが定型化してきており、新たな把握・支援のパターンに関する情報の収集や方法等の検討を行うことが難しい状況になっていることが考えられる。

今後、複雑・多様化してくると想定されるニーズに柔軟かつ適切に対応していくためには、学校側においても把握や支援にあたって、より多くの選択肢を持つておくことが必要であると考えられる。

ヤングケアラーなど悩みを抱えるこどもの把握や支援にあたって難しいと感じていること

全ての学校区分で「問題が表面化しにくく、詳細な把握が難しいこと」の回答割合が最も高くなっている。

なお、前回調査から回答割合としては減少しているものの、「家庭へ介入しづらいこと」の割合も依然として高い傾向にあり、支援の大きなきっかけとなる「問題の把握」と「家庭への接触・介入」が一番の課題になっていることが伺える。

また、高等学校については、小学校及び中学校と比較すると、前回調査より割合が増加している項目が多く、「こども自身やその保護者に問題意識が乏しい、または無いこと」や「保護者から教育方針やしつけなどと言われてしまうこと」なども増加している。

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと

前回調査と比較すると、小学校と高等学校の1項目を除き、全体として割合が増加している項目は無かった。

学校におけるヤングケアラー支援の必要性に関する認識は低下していないと推測されるが、ヤングケアラーに関する認知度も向上してきた中で、学校が支援にあたって必要と考える項目が、前回調査時点より限定されてきたものと考えられる。

また、今回の調査結果においても、前回調査と同様に、「こども自身がヤングケアラーについて知ること」の割合が最も高くなっており、学校では、こどもたちが正しくヤングケアラーについて理解することが重要と考えられていることが分かる。